

17. 重篤な合併症を発症するも待機的手術まで管理できた感染性心内膜炎の一例

循環器内科

○石井 晶子 西 成寛
増田 拓郎 寺西 仁
幡中 邦彦 藤尾 栄起
向原 直木

症例：57歳，女性。全身性エリテマトーデスで当院膠原病内科通院中（ステロイドと免疫抑制薬内服中）。発熱，意識障害にて当院へ救急搬送。敗血症性ショックの診断で，抗菌薬，大量補液，ノルアドレナリン等による治療を開始。心臓超音波検査で大動脈弁閉鎖不全症と弁に付着する7mm大の疣贅を認め，血液培養からはグラム陽性菌を検出し，感染性心内膜炎と診断。急性心不全，心原性出血性脳梗塞などを合併していることから，早期手術は高リスクと判断し，内科的保存治療の方針とした。6週間を要したが，多診療科・部門との連携により集約的治療が奏功し，独歩できるまでに全身状態は改善。残存する大動脈弁閉鎖不全症に対して，心臓外科にて待機的に大動脈弁置換術を施行した。現在，軽度の不全麻痺を残すが，独立した日常生活を送っている。多診療科・部門との連携が，重篤な合併症を有する感染性心内膜炎治療に奏功した症例を経験したので報告する。

18. 調剤室における疑義照会について

薬剤部

○中村 祥敬 荒井 信子
樋本 真紀 村上 陽子
石井 雅人 上野 聖子
奥新 浩晃

【目的】薬剤師は処方内容に疑わしき点を発見した場合，処方医に対して疑義照会を行い医薬品の適正使用および過誤の防止に努めている。院内においては各病棟，化学療法室などに常駐する薬剤師が処方内容の確認を行っているが，初期の調剤時にいかに効率よく確認

および疑義照会を行うかが重要と考えられる。そこで，当院での傾向を把握するため，調剤室における疑義照会の内容を調査したので報告する。

【方法】調査対象は2018年4月～10月の処方箋（内服・外用）とした。また，疑義照会の内容については調剤室に保管されている疑義照会記録を参照した。

【結果・考察】対象期間における処方箋は58,598枚，そのうち疑義照会の対象となったのは284枚（約0.5%）であった。また，内容を分類すると多いものから，入力ミス等によるもの（44%），常用量の誤りなど（38%），検査値にもとづく用量調節に関連するもの（16%），併用禁忌（2%）となった。

以上より，用法・用量のほか，重複や日数など入力ミス等にも注意を払うことで効率よく処方内容の確認を行うことができると考えられた。

19. MRI対応液晶ディスプレイ（Sensa Vue）の有用性

放射線技術部

○日谷 翔太 岩本起一志
福田 尚也 岩見 守人
井手 充浩

【背景・目的】

2017年12月に映像と音楽を鑑賞できるMRI対応液晶ディスプレイ（Sensa Vue）が導入された。今回，Sensa Vueを利用することで快適な検査環境が作れるのかをアンケートを利用して検証した。また，ストレスとなっていると示唆された環境の改善を検討した。

【方法】2018年6月～8月の間に健診頭部MRIを受けられた患者53名（男性：32名，女性：21名）を対象とし，自作アンケートを実施，集計した。閉所恐怖症，小児の患者にもSensa Vueを利用し感想を聞いた。

【結果】Sensa Vueを利用することで，快適な検